

全学学類・専門学群・総合学域群代表者会議

第一回本会議

令和5年5月10日(水)

(議事次第)

議題

1 令和5年度議長団選挙

1-1 議長選挙

1-2 副議長選挙

タイムテーブル

当日の時刻	予定した日程	当初予定
18:30	開会	
18:30~18:37	出欠確認・資料確認	10 分間
18:37~19:06	議長選挙	20 分間
19:06~19:16	投票	15 分間
19:16~20:42	副議長選挙	60 分間
20:42~20:50	投票	10 分間
20:52	延会	
5 月 17 日	副議長選挙（継続）	
5 月 17 日	その他諸連絡	5 分間

出席者

学類等代表者 61 名 詳細省略

資料一覧

- ・ 議事次第

議題

- ・ 令和 5 年度議長団選挙について
…P23001-00
- ・ 学長決定「筑波大学の学生組織について」
…P23001-01
- ・ 副学長決定「筑波大学における学生の組織及びクラス連絡会等について」
…P23001-02
- ・ 議長選挙演説資料（林 凜太郎 提出）
…P23001-03
- ・ 副議長選挙演説資料（江波戸 憧音 提出）
…P23001-04
- ・ 副議長選挙演説資料（菊田 一真 提出）
…P23001-05
- ・ 副議長選挙演説資料（森 望 提出）
…P23001-06

以下、議事録

開会に先立ち、議長団選挙が完了するまで、会議の司会進行は副学長決定「筑波大学における学生の組織及びクラス連絡会等について」（「副学長決定」）55 項に基づき、令和 4 年度全学学類・専門学群・総合学域群代表者会議（全代会）議長 河野 美羽（人文学類、本年度専門委員）が執り行うことが確認される。

開会

○河野 美羽（司会進行）

これより、令和 5 年度第一回本会議を開会します。

出欠確認・資料確認

○河野 美羽（司会進行）

出席者を確認します。慣例に基づき、読み上げられた学類に在籍する代表者の挙手を確認することで確認します。

また、円滑な議事進行のため、ご参加の皆様はこの間に随時資料を確認してください。

出席確認の詳細は省略。

○河野 美羽（司会進行）

学类等代表者の出席者は 61 名です。本会議の定足数を満たしたことを確認しました。

議題

○河野 美羽（司会進行）

議事に移ります。「副学長決定」34 項の定める通り、議長団選挙を執行します。

○河野 美羽（司会進行）

はじめに、令和 5 年度全代会議長を選挙します。候補者を 5 分間募るので、立候補者は演壇の横に並んでください。

林 凜太郎が、立候補の意思を見せる。

○河野 美羽（司会進行）

定刻となったので、林 凜太郎さん、以上 1 名を議長候補と認めます。

○河野 美羽（司会進行）

『令和 5 年度議長団選挙について』に基づき、演説を求めます。

林 凜太郎は資料をプロジェクターで前方に投影させ、適宜参照しながら演説を始める。
以下、補足しながら要旨を示す。演説に使われた資料は P23001-03 に提示する。

○林 凜太郎（社会工学類）

令和 5 年度全大会議長に立候補した、社会工学類の林 凜太郎です。よろしくお願いします。本日はこのような流れ（自己紹介、目指すリーダー像、全大会の現状、公約、の順）で、全大会においてどのような役割を担っていきたいかをお話します。

○林 凜太郎（社会工学類）

繰り返しになりますが、社会工学類 3 年の林 凜太郎と申します。

（経歴を示す。令和 3 年度は総合学域群の副座長、4 年度は社会工学類の座長と調査委員長を歴任。）

ご覧の通り、今年で全大会に所属して 3 年目でございますので、比較的長い部類になります。また、昨年度に関しては委員会の委員長でしたので、その視点も踏まえつつ、まずは自分の理想とするリーダー像、続いて全大会の抱える問題についてお話します。

○林 凜太郎（社会工学類）

構成員の得意なこと、やりたいこと、やらなければいけないことに合わせてタスクを振り分けられるというのが、私の理想とするリーダー像であり、それを目指していきたいです。

やりたいことがあるのに、やり方が分からないという状況はもったいないものですから、それを放置しないようにします。やり方がわかる人材を配置して、やりたいことを実現させます。それによって個人の満足度、ひいては全大会の満足度の向上に努めます。

○林 凜太郎（社会工学類）

次に全大会の現状と課題についてお話します。

ひとつは、全大会の内部活動が活発でない点です。学類等からの代表者に出席が義務付けられている本会議の出席ですが、定足数を満たせずに流会することが見られました。委員会の活動が、他者からの依頼を受けたときのみ動く、受動的なものに終始することが多いと感じました。また、一部のマレーシア研修などの活動的な内容も、志を持った人たちによってなされたものであり、全大会全体としてなされたものではないと思いました。これらは学類代表としての熱意が不足したことにあると考えます。その原因は、全大会への参加の経緯にもあるとは思いますが、それ以上に全大会に貢献する時間が不足し、楽しさを見いだせなかったことにあると思います。

さらには、全大会の知名度が不足している点も課題です。本来は学則に定められた全学レベルの学生組織であり、学生の意向を大学に直接伝える組織であるにもかかわらず、学

内での知名度が低いために学生の声を伝えることができていないと感じます。したがって、全体会は知名度の向上に必ず取り組むべきであると考えます。

知名度が低いという問題は、1つ目には広報力が不足していること。2つ目に全大会の活動量が不足していることが原因と考えます。1つ目の問題は、広報委員会や企画戦略特別委員会などが昨年度から取り組んでいる為、その継続によって改善すると見込みます。2つ目の活動量不足に関しては、昨年度のマレーシアやタイの学生組織との交流でその活動に比べると、全大会はあまり活動を行っていないのかなというふうに感じた次第です。

○林 凜太郎（社会工学類）

理想とするリーダー像として、「構成員の得意なこと、やりたいこと、やらなければならないことに合わせてタスクを振り分けられるリーダー」ということを先ほど述べましたが、その達成のためには、まず構成員とかのやりたいこと、得意なことを把握していなければならないため、各委員会、そしてその構成員のタスクの把握をやっていきたいと考えております。

また、活動の増加については各委員会でやるべき事を共有しなければなりません、昨年度までは各委員長が集まる委員長連絡会で話し合われた内容が構成員の方まであまり伝わっていなかったと思いましたので、委員長連絡会の情報の共有も確実にしていきたいです。

また、先ほど述べた通り、モチベーションの低下の要因は、所属に至る経緯にもよりますが、貢献した実感の不足にあると考えています。そうした中で、モチベーション低下の決定的な契機は活動上の悩み・疑問を相談できる人がいないこと、また、活動の意義がつかめないことにあると考えます。委員長に相談しにくい事柄は、議長団に相談ができるような環境を意見フォームの設置等を通じて実現させ、意義を感じられなくなることがないように、集中しているタスクは分散させて、同じくらいの環境にしていきたいです。

○林 凜太郎（社会工学類）

以上のことに、議長として取り組んでいきたいです。よろしくお願いします。

○河野 美羽（司会進行）

ありがとうございました。

○河野 美羽（司会進行）

質疑応答に移りますが、3点注意点がございます。

1点目です。質疑を求める際には挙手をしてください。係がマイクをお渡しし、発言を許可します。その際には、お名前と合わせて学類、学年をお知らせください。

2点目です。議事次第に従い、質疑は19時05分までとします。

3点目です。最後の応答から1分の間挙手がない場合、質疑応答を終了します。

○河野 美羽（司会進行）

それでは質疑を求める方は挙手をしてください。

以下、質疑の許可にまつわる手続きは省略。

○鈴木 史磨（知識情報・図書館学類）

タスクを分散させ、貢献の機会を増やすことで全大会の満足度を上げるという点についてです。

全大会は1年目であり、過去の組織運営については分からないのですが、率直に申し上げますと、委員長・議長団のような、やる気を持って活動をしている人が多くの仕事を持っているというのは、ある種組織として健全なものです。もちろん特定の人が独りでは抱えきれないような仕事をしているのであれば問題ですが、改めて、なぜそのような方針を取ろうと考えたのかをお聞かせください。

○林 凜太郎（社会工学類）

過去の実績として、委員長をはじめとする、よく全大会室に集合する一部の人に過大な仕事量が回っているということが挙げられます。加えて、現状もこのような傾向が伺えます。そのためタスクの分散は必要なことだと考えています。

○野島 匠史（国際総合学類）

タイやマレーシアの学生組織が活発に活動しているということをおっしゃっていましたが、具体的にどのような活動があったのかを教えてくださいたいです。

○林 凜太郎（社会工学類）

タイでの例を挙げますと、全大会に当たる組織がミュージックフェスを開催していたことがあります。全大会自体はこのようなイベントを主催せず、学園祭実行委員会のような組織が行うのが通例ですから、活動の総量に差が生じていると感じました。

○宮田 青葉（人文学類）

「役職のない構成員まで仕事を割り振り、情報を分配していき、委員長や、それに不満があれば議長団に相談ができる環境を作る」という話がありましたが、現状として、委員長や議長団が他の構成員から遠く、相談ができずに一人で抱え込んでいる事例があります。これをどのように解決していきたいか教えてくださいたいです。

○林 凜太郎（社会工学類）

今年度からはほとんどの委員会で対面での活動が予定されていますので、その点で委員長と構成員の関係は改善されると思っております。

また、議長としては各委員会の活動に流動的に参加、訪問することで関係を深めたいと思います。

○鎌刈 雄大（心理学類）

全代会にはクラス代表者 3 名の参加が義務付けられているのが現状ですから、全代会に対してのモチベーションもまちまちです。全代会全体の熱量を高めるという観点では、その中であまり全代会に興味のない人のモチベーションを向上させることも必要ですが、どのようにそれを実現させるのでしょうか。

○林 凜太郎（社会工学類）

率直に言って、全代会にはいやいや参加しているような人も存在しているという実態は理解しています。体験談として、私も 1 年生の頃は意欲的ではなかったと思います。ただ、全代会で活動する間に、仲のいい人たちができて、コミュニティが形成できれば、その点は自然と解決すると思われます。議長だけでなく、委員長や経験者にもご協力いただいて、語弊を恐れずに言うならば「楽しい全代会」を構成員全員で目指したいです。

○高橋 蓮（人文学類）

議長団や委員長などだけが抱えている仕事を構成員にも振り分けていくという点について、その構成員が仕事をするためには、議長委員長からのレクチャーの必要性があると思います。現状の教育制度についての問題意識や、それに対する解決策などがあれば教えてください。

○林 凜太郎（社会工学類）

調査委員会での例を挙げさせていただくと、年度の始めに業務の説明をしても、実践するまでの時期が遠くて定着に至らないことがありました。そのような委員会が他にあるならば実践の機会を、疑似的な練習課題などを設けて定期的に行うのが良いなどと考えています。

○木下 溪花（社会学類）

全代会の知名度が低いという点について、1 年生として全代会の実態が分からない旨を聞いてきているので実感するところです。この現状に対して最終的にどのような方法で全学へキャンペーンをしていきたいですか。

○林 凜太郎（社会工学類）

先に申し上げました通り、広報活動には 2 つの面があり、1 つが全代会の外に出てくる実際の方法で、それだけでなく、もう 1 つの側面として活動の充実という面があると考えて

おります。そこで私は、活動の充実に関して取り組みたいと考えています。

しかしながら実際の広報の手法に関しては経験が浅いので、広報委員会など、経験のある人物に任せていきたいです。

○鈴木 史磨（知識情報・図書館学類）

例えば自分の所属していない委員会に興味のある活動があったとして、それに自主的に参画できるようなシステムを設けていただけると政策に役に立つと思います。もしも検討いただける場合、具体的な実現案をお教えてください。

○林 凜太郎（社会工学類）

その点に関しては、先に申し上げた委員長連絡会の情報共有を中心に考えております。委員長連絡会とは、各委員会の委員長と議長団が集まり、現状の業務などについて情報共有をする会議でございますので、そこで出た情報をしっかりと皆さまが閲覧できるようにすることで、好みの業務に取り組んでいけるようにしたいと思っています。

○河野 美羽（司会進行）

時間となりましたので質疑応答はこれまでといたします。

学長決定「筑波大学の学生組織について」（「学長決定」）の議長団選挙に必要な、学類等代表の3分の2の本人出席を確認した。

○河野 美羽（司会進行）

投票の手続きについて、副議長代理の川島よりお話しします。

○川島 淳一郎（司会進行）

1名のみ立候補なので信任投票が行われます。お手元の投票用紙から所定の投票用紙を使って投票をしてください。林候補を適格と判断し信任する場合は、信任に丸を、不適格であるので信任ができないとする場合は、不信任に丸を付けてください。

19時10分になりましたら投票箱を持って会場を回ります。それまでに記載を終えてください。

○河野 美羽（司会進行）

続けてオンラインでの参加者にお知らせします。本会議チャンネルに投票フォームを掲載しましたので、そちらの方で投票をお願いいたします。投票者の名前は記録しないように設定しておりますので、匿名投票が保証されています。

○河野 美羽（司会進行）

浅野さん、発言を許可します。

○浅野 宏太（総務委員会）

『令和5年度議長団選挙について』の中に『信任投票について 学類等代表者は「信任／不信任／保留」に投票することができる。』とありますが、お手元の投票用紙には印刷時の手違いによって保留の欄がなくなっています。従いまして林候補を現段階で適格とも不適格とも判断できないとされる場合は、お手数ながら信任・不信任欄の間にあります中黒に丸を付けて表すようにして下さい。印刷担当としてこの場でお詫び申し上げます。

○川島 淳一郎（総務委員会）

総務委員長として改めてお詫び申し上げます。保留の際の投票もそのようにお願いします。

○河野 美羽（司会進行）

オンライン参加者用の投票フォームもこれに合わせて修正を行いました。

○川島 淳一郎（司会進行）

投票用紙を回収します。

○川島 淳一郎（司会進行）

また、投票用紙は匿名投票を保证するために、投票用紙をたたんで投票をお願いします。

投票用紙が回収される。

○河野 美羽（司会進行）

開票を行います。

開票される。途中経過は省略。

○河野 美羽（司会進行）

開票の結果、信任 59 票、保留 4 票、不信任 0 票となりました。

よって、林候補は全代会議長として信任されました。

○河野 美羽（司会進行）

続いて、副議長の選挙に移ります。同様に 5 分間の間に立候補者は演壇の横に並んでください。

江波戸 憧音、菊田 一真、森 望が立候補の意思を見せる。

○河野 美羽（司会進行）

定刻となったので、江波戸 憧音さん、菊田 一真さん、森 望さん、以上 3 名を副議長候補と認めます。

○河野 美羽（司会進行）

『令和 5 年度議長団選挙について』に基づき、演説を求めます。

3 氏は資料をプロジェクターで前方に投影させ、適宜参照しながら演説を始める。

資料はそれぞれ P23001-04, P23001-05, P23001-06 を参照。

以下、補足しながら演説を示す。

○江波戸 憧音（情報メディア創成学類）

この度、副議長選挙に立候補させていただきました情報メディア創成学類の江波戸 憧音と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

まず私が、どこの誰でどんな人かを説明し、それからこれまで全代会でどのようなことをやってきたか、そしてこれから副議長のなった時にどうなっていくかという未来の話をしていきたいと思います。それでは始めさせていただきます。

○江波戸 憧音（情報メディア創成学類）

冒頭でも申しました通り、情報メディア創成学類に 3 年生として所属しています。2 年前に全代会の広報委員会に所属しました。現在はその他にも、情報処理特別推進委員会と企画・戦略特別委員会の 2 つに所属しております。

前年度は広報委員長を務めておりました。また、前年 10 月から約半年ほど制作部長を務めております。これは全代会広報誌『Campus』の発行スケジュールが 10 月締めであることから、委員会内役職の引継ぎは 10 月になることが慣例となっているためです。

○江波戸 憧音（情報メディア創成学類）

具体的に制作したものを紹介させていただきます。

制作物のイメージを投影して、説明を始める。イメージは資料 P23001-04 の 5 ページから 7 ページを参照。

○江波戸 憧音（情報メディア創成学類）

ここまで申し上げた通り、私は全代会の制作物の全てを担ってきたと言っても過言ではありません。ロゴマークの刷新から始まり、ポスターからジャケット、のぼり、それからクリアファイルやシールなどといったものも私が作っていました。

また広報委員会全体として、学生団体紹介誌を、学生生活課と協力して制作し、新入生歓迎祭は Web ページ学生委員会、新入生歓迎推進委員会というところと協力して制作に取り組みました。

また、春日エリアなどに展開しているオフィスマという事業のポスターの制作も個人として請け負いました。また、広報委員会から学生広報会議への人員派遣で、『紫峰の風』という広報誌の作成を手伝っていました。

○江波戸 憧音（情報メディア創成学類）

本年度の広報委員長の言葉を借りて、私は『広報委員会は全代会の最前線である』と申し上げたいと思います。先にお話したことと合わせ、私は全代会の最前線で立ってきた、あるいは走り続けてきたと言っても過言ではないと自負します。だからこそ掲げられる全代会の未来、「これから」についてお話しします。

○江波戸 憧音（情報メディア創成学類）

私は、“Move on to the next level”をスローガンに掲げます。新年度の議長になった林さんがおっしゃっていた通り、全代会は全学組織としてより広く知られるべき組織であると思いますが、現状、各構成員の活動をすべて広報に活かしているとは言えない現状があり、また 100 人近くを抱える組織ですので、全代会の内部でも十分な広報ができていないという現状があります。ですから、もっと各委員会が何をしているのか、どのように役に立っているのかというのを全面的に広報していきたいです。

具体的な行動として、もちろん議長の補佐としての副議長、また各委員長と議長の間接点としての副議長としてサポートをしていくことと、それから活動の目的や役割を明確にすることに取り組んでいきたいです。

活動目的や役割の明確化はトップに立つべき人間がやるべきことです。各構成員は独りでは何をやっていいのかわからないものですから、その方向性を決めていく必要があるのはやはり、委員長や議長、副議長ということになります。ここを明確にして学生組織としてより円滑で活発に動ける、学生生活をさらに改善できる理想の全代会とすべく、土台のしっかりした揺るぎない組織としたいです。

こうした公約を持つ私のアピールポイントは、広報力とバイタリティにあります。また、自分の理想に一意専心、猪突猛進、全力で突き進むことができます。特に、広報力とバイタリティと言う点は、議長の公約である活動の充実化、広報の独自活動の強化に即した能力だと考えています。

最後に、私は議長だけでなく、各構成員をも支えることができる副議長になることをお約束させていただきます。

○江波戸 憧音（情報メディア創成学類）

以上で演説を終わりとします。清き一票をよろしくお願いいたします。

○菊田 一真（情報科学類）

この度、副議長選挙に立候補させていただきました菊田と申します。副議長立候補演説を行わせていただきます。

○菊田 一真（情報科学類）

簡単に自己紹介をさせていただきます。菊田 一真と申します。全代会においては総務委員会の事務部門と情報部門を兼任し、ほかに、自身で設置した情報処理特別委員会や、企画・戦略特別委員会にも所属しています。また、学類は情報科学類に所属しております。3年次編入で大学に入学した4年生です。全代会への在籍は2年目ということになります。

○菊田 一真（情報科学類）

これまでの全代会の活動においては、2022年の6月から10月までは情報部門の部門長代理を、以降2023年3月まではその部門長を、2023年1月からは情報処理特別委員会（IPC）の委員長を務めまして、役職をいただいていることから委員長連絡会にも2022年6月から出席をしています。

また、出身の奈良工業高等専門学校でも学生会長などを務めておりました。

来歴を投影して説明をする。詳細は資料 R23C001_05 の5ページに提示する。

○菊田 一真（情報科学類）

全代会では、例年行っていない新しい活動に注力してまいりました。

先ほど申し上げました通り、IPCを設置したというのが最も大きなものになるかと思えます。

また、この活動の一環として、情報技術者のコミュニティ「UNTIL.」の設立、運営、各種イベントの主催運営を行いました。

それぞれ具体的にご紹介します。

UNTIL.（“UNiversity of Tsukuba Information-technology Lab.”の略称で、通常略称で表記。）は、IPCが主導する筑波大学に関連する情報技術者のコミュニティであり、全代会の外部に広がる活動を行いました。また、UNTIL.に関連して、情報技術者同士の交流を目的としたスライド発表会である、UNTIL.LT（Lightning Talk）も、合わせてIPCが主催、運営をしています。学園祭は、全代会が主催していながら、その運営を学園祭実行委員会に任せていることを考えると、全代会自身が運営する対外的行事というのは珍しいものではないかと考えます。また、NTT 東日本とう道見学会もIPC主催の元で行いました。このような対外的、特に学外への目線がこれまでの全代会には不足していたと感じていました。こうした活動がマレーシア研修など、これから増えるであろう学外交流の先駆

けとなったと自負しています。こうした新たな活動、対外活動は林さんや江波戸さんがお話ししていた広報促進に役買うのではないかと思います。

○菊田 一真（情報科学類）

総務委員会情報部門としての日常業務についてご紹介します。

例えば、新歓 Web、全代会ホームページのリニューアルについては、適材適所を意識して、別の委員にプロジェクトリーダーを任せて、自分はひとりの委員としてそこに参加しました。

また、最近の活動としては名簿の管理が挙げられます。これはほとんどの人の目に触れないものではありますが、これまでの全代会ではその管理が行き届いていなかったため、昨年度から今年度にかけて改修作業を行いまして、現在は主に私が管理をしています。今年度の新規加入の方の登録作業なども務めさせていただきました。

○菊田 一真（情報科学類）

委員会の枠にとらわれない活動も、一部は企画・戦略特別委員会と連動しながら行ってきました。

まず、会計制度の制定を行いました。こちらに関しては、制度設計から部署の設立まで、少数の人に相談をさせていただきながらも、ほぼ私が行ったという形となります。また、昨年度、座長や副座長という全代会独自のポストからクラス代表者会議の議長や副議長が全代会に参加するようにするため、学生組織に関する規定の改正を行いました。この際に実際の規定文は私が書き上げました。

そのほかにも委員長連絡会に参加する中で、議長や副議長の手に負えないタスクがあった場合にはそれを代行したり、全代会研修会の会計を行ったり、普段使用している教室の隣に新しく申請した全代会用の部屋についてもその申請の手続きなどを進めていました。

これらの活動実績を踏まえて、これからの展望についてお話しさせていただきます。

○菊田 一真（情報科学類）

これからの展望は大きく3つ、既存のものの改善、新たな活動の実現、それから今後を考えるべき議論に分けてお話しします。

まず全代会の規約改正です。全代会は「内規」と俗に呼ばれる規約を定めておりますが、これは大学が定めている、「学長決定」、「副学長決定」の補足説明をするような形で、自ら規則を定めている形の部分は非常に少ないです。また、動議が認められ、議論されて決まった参考意見の取り扱い、それからオブザーバーにはどの程度の権限が認められるのかが定められていない点、傍聴人や参考人との違いが定められていない点など、現在の規約にはあやふやなところが多いです。さらに、現在の学類等代表の中には、前年度で言う座長、副座長という身分の差があり、例えば動議は学類座長のみが発議できるとされています。また、形を変えてクラス代表者会議議長・副議長となった今も、代理出席を依頼する際に、代わりの人物を指名できるのは規定の上ではクラス代表者会議議長のみとなっております。こうした差にはあまり意義がないと考えています。さらには、全代会の中

での運用を少し変更したい場合でも、その多くが学則に定められている関係から、頻繁に「学長決定」、「副学長決定」の変更を要請しなければいけないということになっています。ですから、そうしたことを減らすためにも、なるべく全大会の内部のことは全大会で定めるべきであると考えています。

そのためにはどうすべきかと考えますと、全大会が全大会自体を定義する規定を制定すべきだと考えています。大学が定める規則は、いわば国家にとっての憲法ですから、その範囲に沿って新しく自分たちで規定を設ける形にするべきです。そのうえで、厳密に定めるべきこととそうでないことを分け、また重要性や見直しの頻度に応じて細則、内規といった下位の規則に落とし込んでいくべきだと思っています。そうした形にするため、残すべきもの、改めるべきものを一度精査する意味でも現状の「内規」の全規定を見直す必要があります。

続いて、組織形態の見直しについてです。全大会についての中心的な意思決定は先ほどから申し上げている委員長連絡会で行われることが多いです。議長、副議長、それから各委員長や総務委員会の部門長、広報委員会の制作部長や編集長といった役職が参加しています。

しかし、本来の委員長の責務は各委員会の統括であって、もちろん委員長という役職は全大会全体を見渡す必要はありますが、委員長になった途端にそうした全体会議に参加する必要があるのは難しいと考えております。その一方で、林さんへの質問にもあったように、委員長連絡会に参加していない人間が全大会全体を見通して活躍すること、ひいては運営に協力していくことができないのではないかなと考えていました。

したがって、委員長連絡会のほかにも運営そのものを置く部署を設置する必要があると思います。これによって、運営に携わる人を増やし、議長、副議長、委員長などが本来の業務に専念できるような組織作りをしていきます。

具体的には、暫定的に企画・戦略特別委員会を議長直属の組織とし、委員会でのご賛同が得られるならば副議長が委員長になるという形にしたいと思います。将来的には、規定改正とともに、議長直属の組織として「執行部」のような組織を作り、委員会の枠にとらわれない枠組みを設けたいです。

○菊田 一真（情報科学類）

また、会計制度の整備を進めていきます。

現行の制度では、全大会そのものは予算を持っていないため、学生生活課に購入を依頼して、それが貸し与えられているという運用がされています。パソコンのような物質的な耐久財や、ほかの消費できるものについてはこれだけで問題がない一方、継続的な支払いを要するサブスクリプション契約が必要なサービスを採用することはこの方式では困難です。

そのため、独自の予算が必要なのですが、そのためには収入の確保が必要です。紫峰会基金からの援助を受けるための依頼を行う必要があります。ここではその詳細については割愛させていただきます。

さらに、情報に関する活動を推進します。

大学は、入試の Web 出願を推し進めたり、全代会が要望していた教室申請システムの電子化に関する協議を進めたりするなど、ICT の活用を進めています。そうした中で、課外活動に関する申請や教室申請など、学生が関与するものは学生が大学組織と協力しながらシステム構築を進めていけるようにしたいです。

○菊田 一真（情報科学類）

最後に、全代会と大学院生との関係性についての議論です。

全代会と大学院生との関係性は不明なところが多く、参加可能かどうかさえ不明となっております。専門委員としての参加が可能であるかというのがその大きな焦点です。

それから、教育生活環境調査に大学院生が回答すること、全代会が受理できるかどうか不明です。学食、売店に関する相談、道路に関する相談、学内生活に関する相談はその多くが学群生と共通する一方で、大学院生は学生分担金を負担せずとも、学園祭へ参加できるという現状もあります。これについて学生分担金を拡大すべきとも、大学院の参加を断るとも、結論をこの場で出すわけにはいきませんが、こうした議論は進められるべきであると思います。

○菊田 一真（情報科学類）

私は副議長として、規約の設計や情報管理、会計に関する知識や技術を生かした意見、また、奈良高専の学生会など、ほかの組織で積んだ経験や学んだ知識といったものを生かした意見を議長と共有したいと思います。そして、議長の補佐と、執行部隊のリーダーという 2 つの柱を持ち合わせて、副議長の責を果たしたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。ぜひ、良心に従った投票をお願いします。

○森 望（社会学類）

副議長に立候補した、社会学類 2 年の森です。

本日は、私がどのような人物であるかについて、それから林先輩と同様に、私の今年度の副議長としての理想像について、最後に昨年度の副議長であった経験から、今年度のアジェンダをお話します。

○森 望（社会学類）

まずは自己紹介をさせていただきます。重ね重ねになりますが、社会学類 2 年生の森望と申します。

社会学類のクラス代表者会議議長を務めています。昨年度は調査委員会、新入生特別委員会、企画・戦略特別委員会の委員を務めており、今年度も継続する予定です。

また、筑波大学の OB・OG 会である校友会に、在学生からのアドバイスをいただきたいということで理事として参加させていただく予定となっております。

○森 望（社会学類）

続いて、今年度の副議長としての理想像についてお話しします。

全大会の議長団に求められる素質として、私は次の3つが挙げられると考えています。

1つ目が、全大会と筑波大学に関する知識。2つ目が1年間を見通せる計画力。3つ目が積極的な情報共有の姿勢です。それぞれについて詳しくお話しします。

1つ目の全大会と筑波大学に関する知識についてです。

皆さんが委員会活動で分からないことがあった場合、それは委員長に相談されることと思います。その一方で、委員長でも分からないことは、委員長連絡会を通して議長団に相談されますが、その時に的確に答えられるだけの知識が必要となります。従って、議長団には筑波大学に関する知識が必要です。そのうえで、各委員会の活動についても、委員会から一步引いた形で俯瞰することで客観的に分析する必要があります。

その上、各委員会の細かな活動については議長団が決裁をする必要があります。ポスター1枚の掲示の可否のために本会議を開くのは現実的でないからこそ、議長団は3人でその判断を下し、責任を終える程度の知識が必要です。

2つ目の1年間を見通せる計画力についてです。

1年を通して各委員会で様々な活動、企画が同時並行で進み、ある委員会は本会議に要望書を提出しようとしたり、別の委員会では新たな行事を開催しようとしたりします。そして、そうした活動は一朝一夕に行われるものでなく、準備が必要です。

そのため、各企画の完成を見越した計画が必要になります。特に、要望書の提出時期が本会議を開きにくい試験期間前などに衝突しないように完成目標を伝える必要があります。

3つ目の積極的な情報共有についてです。

議長団が全大会の中で最も早く情報を受け取るという場面が多々あります。

特に、全大会の代表メールを確認するのは委員長連絡会、ひいては議長団の役目で、特に大学からの依頼は議長に向けて送信されていることが多いので、そうした情報を素早く関連する委員会に伝達する必要があります。従って、即応力というのが求められています。

○森 望（社会学類）

昨年度の副議長であった点について、お話しします。

私は現在の78名の学類等代表の中で全大会議長団を経験している唯一の人物です。

そのため、様々な全大会の活動に参加してきました。投影しているのはその一部です。

こちらをご覧ください。これらはオリエンテーションや全大会説明会で使用された写真ですが、多くのところで私が写っていることから活発さがわかると思います。

また、国際特別委員会、情報処理推進特別委員会といった所属していなかった特別委員会、常任委員会を合わせてすべての委員会のミーティングに複数回参加してきました。

また、議長団として大学教職員らとの会議にも出席しています。研修会でご挨拶いただいた学生生活課の加賀先生などと協議するランチミーティングをはじめ、様々な会議に出席してきました。

こう考えますと、私は全代会の構成員の中でも最も多くの企画に参加してきたと自負しています。

(参加活動の一覧や、写真については P23001-06 の 9 ページから 11 ページを参照。)

そうした経験から感じた課題点が 3 つございます。

1 つ目は議長団の様子が伝わっていないこと。2 つ目は大学教職員との意見交換が不足していること。3 つ目は全代会と各学類の連携が不十分であることです。それぞれお話しします。

1 つ目の議長団の様子が伝わっていないことについてです。

昨年活動の中で「議長団が何をしているのか分からない」という声を多くいただいたことが印象に残っています。実際の活動を例に挙げると、本会議の議題を受け付け、準備をして当日の議事進行をすること。それから全代会の代表として様々な会議に出席すること。委員長連絡会で各委員会の活動を把握し、ランチミーティングで学生生活課と共有することなどがあります。

これを改善するためには、理想像としてお話ししたような情報共有の積極性が足りていなかったと考え、その反省を生かして、活動内容を構成員が閲覧できるように情報ツールを活用していきます。

2 つ目は大学教職員との意見交換が不足していることについてです。

学則で定まった意見交換の場は、学長懇談会と副学長懇談会が存在し、合わせて年 3 回行われていますが、これでは少ないと考えます。また、本会議で承認された要望書を各所に提出することもあります。この場合では書類でのやり取りが中心となってしまいます。学長懇談会、副学長懇談会でお会いした太田副学長からも「もっと積極的な連絡をしてほしい」とご指摘を受けてしまったこともあります。

それを受けて、昨年度から意見交換を徐々に増設することにしております。

昨年度は教育環境委員会と加藤副学長、それから教育関係部門の職員との意見交換が行われ、また、調査委員会と附属図書館職員とでも意見交換が行われました。この動きを生活環境委員会などのほかの委員会でも実施することで、大学の資源的な制約の中でどのような提案をしていくのが学生のためになるかを考えることを可能にします。

最後に、全代会と各学類の連携についてです。

昨年度の学則改定で、座長団の代わりにクラス代表者会議の議長と副議長が全代会に参加することで、より直接的に各学類などの代表の出席を促し、学類などとの連携を強めようとなりました。しかし、この改定の方針性は私の副議長就任前からクラス代表者会議議長を集めて各学類などにお伝えしていましたが、クラス代表者会議が 10 月改選の学類などの

例外が発生し、いくつかの学類とは「申合せ」を結んで対応しているという現状があります。

また、教育生活環境調査をはじめとした、いくつかのアンケートを全代会から各学類などに送っているのですが、一部の学類からは回答が全くないという事態も発生していて、調査が不十分な形にならざるを得ない状況になっています。

結論としては、各学類のクラス代表者会議の代表を集めた会議としての連携性が保たれていないと言わざるを得ない部分があります。

その解決策として、自身のクラス代表者会議の運営経験を発信し、それから積極的に活動している学類のノウハウについての情報発信も全代会のトップとして推進していきます。それに合わせてクラス代表者会議議長懇談会を継続して開催することで、そのノウハウが学類に共有されることで、全代会の認知も各学類に浸透させます。

○森 望（社会学類）

まとめますと、議長団には、全代会と筑波大学に関する知識、今年度一年間を見通せる計画性、情報を積極的に共有して行くという姿勢の3つが求められています。

議長団の様子が伝わらなかったことに対しては、積極的な情報共有を行います。学生の意見を大学職員に伝えること機会が少ないということに対しては、意見交換会などの増設をさらに進めます。全代会とクラス代表者会議の連携が取れていない点に関しては、その運用のノウハウの情報を発信し、浸透させることで全代会の認知度を上げることにつなげます。

○森 望（社会学類）

以上となります。ご清聴ありがとうございました。

○河野 美羽（司会進行）

演説してくださった3名の方々ありがとうございました。

只今より質疑応答に入らせていただきます。質疑応答は15分行うこととして、20時27分までを質疑応答の時間といたします。質疑応答の流れに関しては先程説明した通りです。

それでは質問意見等ありましたら挙手のほうをお願いいたします。

以下、質疑の許可にまつわる手続きは省略。

○吉川 栞（総合学域群第2類）

森さんにご質問します。昨年度議長団として、昨年度の課題点を言っていましたが、逆に昨年度のここが良かったなという点があれば是非教えていただきたいです。

○森 望（社会学類）

昨年度の活動の良かった点は、特別委員会として新たな試みが増えたことです。

菊田さんがおっしゃっていた情報処理特別委員会の他に、国際特別委員会も設立され、海外研修の他にも留学生に向けたイベントを実施し、留学生と国内生とを繋ぐ試みを実施されたというのが昨年度の良かった点だと考えております。

○鈴木 史麿（知識情報・図書館学類）

江波戸さんと菊田さんにお聞きします。

お 2 人とも広報や情報共有に力を入れたいとおっしゃっていましたので、私の個人的な興味から質問をしようと思います。

今のところは本会議、委員長連絡会を配信していないと理解していますが、なぜそのようなことができないのかを疑問に思っています。

雰囲気が直接全学に伝わりますし、学生も傍聴が容易になると考えています。ご意見をお聞かせください。

○江波戸 憧音（情報メディア創成学類）

本会議の広報という点では以前から取り組んではいました。私の任期では SNS での発信を行っており、また以前はポスター制作もおこなっていました。しかし、リアルタイムでの発信というのは、内容によっては不確定の情報、あるいは誤情報となってしまいます。結果として情報が独り歩きしてしまう場合も考えられますので、本会議の内容によっては発表することができない場合もございます。

副議長となりましたら、こういった懸念点に注意しながら告知していきたいです。

○菊田 一真（情報科学類）

私は制度面を考えることに長けておりますので、そちらの面から回答させていただきます。演説でお話させていただきましたが、オブザーバーとは何か、傍聴人とは何かという定義があやふやという状態もあり、広報しにくいという状況がございます。

ご指摘いただいたように、オブザーバーも大々的な募集はされておらず、事実上、専門委員の参加のための制度になっているのが現状です。ですので、傍聴に関する規定をより明確にして、整理された制度の下、広く本会議やその傍聴のアピールをすることが大切なのかなと考えております。

関連して、最近取り組んでいるものとして、議事録など、会議にまつわる情報の管理が挙げられます。その議事録の公開にあたり、情報の不足やセキュリティ面で不安があると、振り返る資料として最適ではないものになります。情報発信をするためには、まず情報をまとめなければならないという意味で、情報発信の土台から順に取り組もうとしております。

○江波戸 憧音（情報メディア創成学類）

1点だけ補足をさせてください。前年度の運営形態では、本会議等の資料が前日の夜、もしくは当日の朝等に発信されることがありました。

広報委員会としても、広報できる情報が本会議の直前まで少ない状況だったと認識しています。ですから、本年度は会議準備でも改革を行っていき、広報活動にさらに力を注げる会議運営をして行こうと思います。

○佐藤 凌（物理学類）

最初に、候補者の皆様からの熱い演説をいただきましたことに感謝を申し上げます。ありがとうございました。皆様が如何に副議長に適した人材であるかがひしひしと伝わりました。

そこでお伺いします。皆様が副議長という肩書きを必要とする理由、あるいは副議長、あるいは議長団になることの一種の必然性、肩書きを必要とする理由をお聞かせください。

○江波戸 憧音（情報メディア創成学類）

発表順に従って江波戸から順にお答えいたします。

演説でもお話しした通り、私は広報について力を入れていこうと思います。

また、副議長になることによって、議長団が活動を行っているのにもかかわらず、広報ができず、活動が不透明に感じられるという点について、広報委員会出身の私が入ることで活動内容を全代会全体、そして全学に、さらには全国に広げていこうと思います。

○菊田 一真（情報科学類）

2点ございます。

まず、副議長は責任ある職ですが、私が申し上げた通り、今年取り組みたいものが4つ、大学院の議論を含めて5つあります。中には、規約改正などの大きな仕事は、ひとりの構成員という立場で推し進めるのは難しい点があります。ですから、やろうとしていることの量と大きさに見合った責任を負う必要があると考えております。責任のない立場から意見をたくさん上げるより、責任のある立場で実行するために、副議長という役職が必要だと考えております。

2点目は、執行部の構想に関連します。

私はこの構想において、議長、副議長は議長団という枠組みに閉じこもって運営をしてはならないと考えます。ですから議長、副議長の3人だけが物事を主導するのではなく、執行部として、広く人員を募ることが良いと考えております。こうした前例のない枠組みを作るのは、ただの構成員という立場から「俺たちを運営に参加させろ！」と訴えるのは無理があると思っています。逆に、議長団という古い枠組みの中から「皆さん来てください」と訴える必要があるのです。これが副議長になる理由となります。

○森 望（社会学類）

継続性、知識という2点から副議長になる必要性を説明いたします。

先にお話しした通り、今年度も副議長としていただければ、2年連続で副議長を務めることになります。その大きなメリットは、これまで議長団として参加してきた会議が、同じメンバーで継続できるということです。議長団が全て改選された場合は、書類や口頭でこれまでの会議の経緯を引き継ぎいたしますが、どうしても抜け漏れは生じてしまいます。それに比べて実際に会議に参加して、お互いにすり合わせをすることで、より精度高く、継続的な議論ができると考えております。

2点目の知識についてです。私は委員としては調査委員会、新入生歓迎特別委員会、企画・戦略特別委員会の3つのみの所属ですが、ほかの委員会にも議長団として様子を伺う意味で参加をし、各委員会がどのような業務をしているかを実態として経験してきました。それを通して、議長団という安定したリーダー的な立場からアドバイスをすることができると考えています。また、江波戸さん、菊田さんが挙げている構想に関しても、全くの門外漢であるとは思っておりません。この3人の内、誰か1人の落選によって、その構想が全くなくなるのは惜しいとも考えております。それを引き継ぐに足る全代会に関する知識を私は持ち合わせていると考えております。

○鈴木 史磨（知識情報・図書館学類）

お三方にご質問します。お三方とも責任ある職に就くにあって具体的な理想や構想を持っていることと、それを副議長の権能を用いて実行していきたいということをお話いただきました。

しかし、副議長がそれぞれの構想に向けて仕事をしていくのは、林新議長の課題認識であった『役職のある人に仕事回り、一般の構成員に仕事が行き渡らない』と重なって、不均衡をなくしたい林さんと逆の方向性を向いているように感じています。

それを踏まえてお聞きします。皆さんのお考えになる新しい企画などが始まったとき、その仕事は今年度、さらには5月、6月という早い時期から一般の構成員に仕事が割り振られていくのか、あるいは今年度1年間は上級生を中心に土台作りが行われて、来年度からの本格化を期すのか、つまるところどのように増加する仕事の分配が行われるかをお聞かせください。

○江波戸 懂音（情報メディア創成学類）

こちらも発表順にお答えします。

林さんは、仕事を全体に振り分けて行って、実現する物事を大きくすることで全代会を盛り上げようと考えているのではと考えます。一方で、議長と副議長は、言うなれば「前方に立つ人と後方に立つ人」でして、私は「後方から広報をする」人間であります。

例えば、林さんがやる気の低下防止について語っていましたが、私も、これまでロゴマー

クやクリアファイルなどについて「こういうものがあると楽しいよね」という気持ちを持って制作してきたものです。ですから、私は林さんが進める方針に合わせて、私は様々なアイデアを持ち合わせることで、副議長として全体を見渡すことによって、林さんの理想を実現させていこうと考えています。

ですから、一見して逆の方向を向いているように感じて、実際には同じ方向を向いているということをご理解いただければと思います。

○菊田 一真（情報科学類）

江波戸さんとも似通った考えを持っていますが、私は方針を決めるのは議長の仕事であると考えていて、私もそのタスクを振り分けられる側だと認識しています。その中でさらに副議長からタスクをほかの方に分けようとするときに、今まで通りの振り分けではなく、私の執行部構想のように、やりたい人を探して、一緒にやれるような体制を作りたいと考えています。そうした体制を率いるためにも、私は思考部隊のリーダーという立ち位置と一緒に担う副議長を目指しております。そういうことです。私だけが抱え込む形にはならないのかなと考えております。

現在も関わりたい人を探して、協力するという方法については試しているところです。例を挙げれば会計制度は総務委員長の川島さんと共同で仕事を進めています。

○森 望（社会学類）

お二方と重複した回答になると思いますが、私たちは確かに具体案を多く持ち合わせた人間です。ですからもし我々が仮に議長として全代会の中心に入った場合は、その具体案それぞれの実現に傾倒してしまうとも考えます。

一方で、我々が副議長であり、林先輩の補佐をさせていただくことを考えると、議長の考える課題点に対して私たちは「こうしてみたらどうでしょうか」と具体的な案を出すことができます。クラス代表者会議の運営方法についてなど、まさにそのような形になるかと思います。そう考えてみれば私たちと林議長の方針は対立するものではなく、むしろ共存するものではないかと思います。

○河野 美羽（司会進行）

ただ今の質疑の前に挙手をしていた方々を指名して、質疑応答を終了とします。

これまで挙手していた方は続けて挙手をお願いします。なお、質疑と応答はそれぞれ簡潔にお願いいたします。

○桑原 侑（総合学域群第1類）

菊田さんに2点お聞きします。4年生ということでしたが、卒業研究との兼ね合いによって活動できる時間に制限ができてしまうのではないかと懸念していますが、どうお考えで

しょうか。

また、大学院生と全代会の関係性については、「学長決定」を鑑みるに、その第1項に『(前略) 学士課程の学生が討議し、(中略) 自主的に運営される学生組織等について定めることを目的とする。』と書いてあるため、全代会は大学院生を含まないと解釈して良いのではないかと考えていますが、ご意見をお聞かせください。

○菊田 一真（情報科学類）

時間的な余裕については、すでに筑波大学大学院からの推薦をいただいていることや、4年次必修である科目を除いて必要な単位を修得していることから、授業時間による拘束がないことなどによって、むしろ1年次から3年次の方々に比べて時間的余裕があるともいえるのではないかと考えています。

また、大学院生との関係につきましては、『学士課程の学生（以下、『学生』という。）が討議』という観点では、討議の場である本会議への参加、簡単に言いますと学類等代表として選出されることは明確に否定されと考えています。ただし、討議に直接関連しない、例えば意見の集約の場としての存在であるとか、あるいは運営であるとかについては明確にされていないことから議論の余地があると考えております。

○丹羽 達也（看護学類）

森さんにお伺いします。看護学類の学類代表がすべて1年生で構成されている通り、各学類の間で現在のクラス代表者会議の人数構成、経験値には大きな差があると考えております。そうした中でクラス代表者会議を活発にしていこうと考える森さんは各学類の全代会構員の選出方法などについても把握されているものでしょうか。

○森 望（社会学類）

昨年度の段階で各クラス代表者会議の方々と話し合いの場を設けていたのですが、その場に副議長として参加していましたので、今のところ、私が最も各学類の事情を知っている人間なのかなと感じています。その中で学類代表を1年生の中から選ぶしか方法がないという学類があるのも、看護学類以外にも存在していることを含めて把握をしております。今年度はオリエンテーションで説明を行って、その場で選出をするという手段を取りましたが、組織としては脆弱であることは間違いないので、その点を補強する意味でも活性化を推し進めたいと思っています。

○宮田 青葉（人文学類）

まず、企画・戦略特別委員会について菊田さんへご質問します。

企画・戦略特別委員会はミーティングが不定期であることや、活動内容がばらばらであることから、いったいどのような組織かわかっていないところがあります。そのような組織で

意見の吸い上げというのは十分にできるものなのか懸念を抱いていますが、ご意見をお聞かせください。また、それに関連して企画・戦略特別委員会の委員長を副議長が兼任するというお話がありましたが、その点も皆さんの言っていたタスクの分散に逆行する公約だと考えています。合わせてお考えをお聞かせください。

○菊田 一真（情報科学類）

不定期なミーティングという点については、週に1度でなくとも、定例で行うことや、また、新たなタスクが発生するたびに、その振り分けを話し合う形でミーティングをしていくことで接触機会を増やしていきたいと思います。また、委員の数にもよりますが、執行部構想を進める上では委員長連絡会との合併というのも検討していきたいです。

また、企画・戦略特別委員会の委員長と副議長の兼任という点は、委員長はあくまでタスクを振り分けるのが主な役割であると考えています。だからこそ、副議長にタスクが集中することは少ないのではないかと考えています。

○宮田 青葉（人文学類）

委員長連絡会と企画・戦略特別委員会の合併というお話がありましたが、そのようにして人数が増加すると、委員長連絡会の機能の一側面であった「個人情報を取り扱える会議」「少人数で話し合いができる会議」という側面が薄れてしまうことになると思います。

○菊田 一真（情報科学類）

その点は、委員の人数に応じて考えていきたいと思います。多くの委員が集まるようでしたら混雑を回避するために分離するのが良いと思いますし、一方で、少人数で集まれるようでしたら、多少人数が増えるのは許容できると考えております。現在の委員長連絡会も、委員長級に限られた話し合いの場というわけではなく、必要な人については参加できるもので、その範疇にあるものだと考えています。

○宮田 青葉（人文学類）

続いて森さんにもご質問します。昨年度の規約改正による混乱というのは人文学類でも発生していたのですが、そうしたクラス代表者会議との連絡体制に対する施策として、クラス代表者会議同士でノウハウの共有をするというお話をされていました。

しかしながら、人文学類のクラス代表者会議は決して活動の少ない会議ではなく、むしろ活動的であるにもかかわらず伝達において難があったものだと考えています。この場合、ほかの学類の動き方を模範にとるというだけでは解決できないものだと思います。お考えをお聞かせください。

○森 望（社会学類）

人文学類のクラス代表者会議の運営については、こちらも伺っております。そして私が申し上げました、ほかの学類とは確かに状況は違うと思っております。その中で、規約改正の点は一昨年の構想が昨年の段階で昨年の人文学類クラス代表者会議に伝わっていたかどうかという点を全大会の立場からは検証していきたいです。

また、すべての学類に対して、社会学類のような 1 つの学類のとり方が合致するということは考えておりません。ですからこの点は全大会の、学類組織を俯瞰する立場から個別に向き合っていく必要があると考えています。

○河野 美羽（司会進行）

質疑応答はこれまでといたします。

○河野 美羽（司会進行）

投票の手続きについて、副議長代理の川島よりお話しします。

○川島 淳一郎（司会進行）

定数 2 に対して、3 名の立候補ですから、競争投票が行われます。お手元の投票用紙から所定の投票用紙を使って投票をしてください。候補者欄に、最も適格と思われる候補者 1 名の氏名を記載してください。候補者の氏名は正面の黒板、および Teams の記載を参照してください。

20 時 45 分になりましたら投票箱を持って会場を回ります。それまでに記載を終えてください。

○河野 美羽（司会進行）

続けてオンラインでの参加者にお知らせします。本会議チャンネルに投票フォームを掲載しましたので、そちらの方で投票をお願いいたします。候補者 1 名をお選びください。

○川島 淳一郎（司会進行）

投票用紙を回収します。

○川島 淳一郎（司会進行）

また、投票用紙は匿名投票を保证するために、投票用紙をたたんで投票をお願いします。

投票用紙が回収される。

○河野 美羽（司会進行）

開票を行います。

開票される。途中経過は省略。

○河野 美羽（司会進行）

開票の結果、江波戸候補が 18 票、菊田候補が 31 票、森候補が 11 票となりました。

よって、この投票ではいずれの候補者も学類等代表の過半数の投票を得られなかったため、次のように判断いたします。

○河野 美羽（司会進行）

会場の使用可能時間の関係から、議事『令和 5 年度議長団選挙』はここで中断することとします。

選挙は 5 月 17 日に継続して行うこととし、それまでは本会議を休会いたします。

5 月 17 日では『令和 5 年度議長団選挙について』に従って、その冒頭で得票上位 2 名だった菊田候補、江波戸候補に再度の演説を求め、決選投票を行います。

○河野 美羽（司会進行）

休会の前に、本日選出されました議長よりご挨拶をいただきます。

○林 凜太郎（議長）

議長に選出されました林 凜太郎です。信任いただきありがとうございます。今年度は構成員に寄り添った全代会、また大学に寄り添った全代会を目指していきますので、今後ともよろしくお願いいたします。

○河野 美羽（司会進行）

議長のほうは選出されましたが、選挙のほうは引き続き私が司会進行をさせていただきます。

しかしながら、ひとまず新しい議長の決定によって前議長としては一つの区切りを迎えられたと思います。1 年間ご支援いただき誠にありがとうございました。

引き続き、本会議へのご参加のほど、よろしくお願いいたします。

○河野 美羽（司会進行）

本日はこれにて延会することとします。

2 日目の会議は 5 月 17 日、18 時 30 分に開会いたします。

延会

以上、総務委員会 浅野 作成